平成２０年度第２回はけの森美術館運営協議会

議　事　録

開催日時　　平成２０年１２月５日（金）午後６時～８時２０分
開催場所　　小金井市前原暫定集会施設２階　Ｂ会議室
委　　員　　出席：鉄矢悦朗会長、宮村令子副会長、小柳　清委員
　　欠席：千村裕子委員、淀井彩子委員、冨士道正尋委員
事 務 局　　薩摩雅登学芸顧問
　　大野　玲学芸員、神津瑛子学芸員、鈴木雅子文化推進係長、
　　天野達彦事務担当

議事内容

【鉄矢会長】　　では、平成２０年度第２回小金井市はけの森美術館運営協議会を開催いたします。

まず、資料の確認をお願いします。

次第があります。それから協議会資料の入館者数等がある表のもの。それから手書きのアンケート等の回答のものと、それからそのほかに資料１、資料２、資料３――皆さん、漏れなくありそうなので進めさせていただきます。

ではまず平成２０年度第１回小金井市はけの森美術館運営協議会議事録について、事務局のほうからご説明ありますか。

【事務局天野】　　今日、前回の第１回の議事録の校正ということで、まとめたものをお持ちしてございます。各委員におかれましては、内容をご確認いただいて、もし変更があるようであれば、事務局のほうにご連絡をいただければと思います。その修正後に、議事録として市民に情報公開していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　　これはいつまでですか？

【事務局天野】　　来週中ぐらいに修正があればいただければと思います。

【鉄矢会長】　　では来週中までに、ありましたらお願いします。

では議事のほうに入りたいと思います。

議題の１番、美術館の運営について、まず（１）平成２０年度の事業実施状況について、ご報告のほうを事務局よりお願いします。

【事務局天野】　　では最初に私から、入館者数等についてのご報告をさせ

ていただきたいと思います。

資料番号が振っていない「平成２０年度小金井市はけの森美術館月別入館者数調べ」というのと、それから「平成２０年度小金井市はけの森美術館展覧会ごとの入館者数調べ」という２種類のデータを１枚の中に表現してございます。上につきましてはごらんのとおりに月別の４月～１２月、これは、昨日現在までの数字でございます。これは月ごとの入館者数の調べでございまして、有料入館者数、それから無料の入館者数、それの合計と、それから有料の項目につきましては、各月ごとの売り上げを大人・子供・合計という形で、無料につきましては幼児・招待者・障害者・団体ということでそれぞれまとめて、月ごとに表現してございます。右側の合計というのが４月以後の昨日までの入館者数等の総合計でございます。それから下のほうの展覧会ごとの入館者数の調べでございますけれども、３月２９日～６月１日までの所蔵作品展Ｉから現在松本市美術館展をやっているわけですが、それまでの３つの展覧会の入館者数が記入されております。

それで合計の欄の入館者数が、月別のでは大人の当日券入館者数が３，５２３となっております。それで２０年度の展覧会ごとの合計数が３，５８２となっているんですが、これにつきましては、上の表は今年度２０年度の入館者数の数字でございます。それで展覧会ごとの入館者数につきましては、所蔵作品展Ｉというのが３月２９日から始まっていますので、その分の差、３１日までの３日間の入館者数が５９名ございましたので、下のほうか上の表と比べて５９名分少ないということでございますので、その辺はご理解いただきたいと思います。

入館者数の調べにつきましては以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

何かお気づきの点とかございますか。

【事務局天野】　　ちょっと説明が不足してございました。月別の入館者数のところで、１０月が２つございます。これにつきましては、下の展覧会ごとの入館者数をちょっとごらんいただきますと、２００８年所蔵作品展Ⅱというのが７月１日～１０月５日まで開催してございました。それでこの１０月の上のほうの表の前側の１０月というのが、所蔵作品展Ⅱの入館者数でございます。それで後ろのほうの１０月というのが松本市美術館の入館者数でございます。何でこういう分け方をしたかといいますと、入館料が所蔵作品

展の場合は２００円、それから今回の企画展の松本市美術館展については５００円という形で、これは私どもが統計をとるために分けさせていただいたということでございます。

それから、ここの中では詳しくは出てないですけれども、１０月４日、５日につきましては、市制５０周年記念ということで無料開放日を設けました。それで、入館者数が２００名を超えました。

【大野学芸員】　４日が２１５名、５日が１４８名です。

【事務局天野】　ということで、無料開放日にそれだけ入館者があったということでございます。以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

所蔵作品展Ⅱのほうが松本市美術館展よりも人数が多くなっちゃうのかなと思ったら、会期が全然違うんですね。

【事務局天野】　そうなんです。ちなみに所蔵作品展Ⅱの会期が８４日で。

【鉄矢会長】　２か月ないんですね、松本市美術館展は。

【事務局天野】　松本市美術館展は４２日間なんですね。所蔵作品展ⅠとⅡは長期間やっていたという状況でございます。

【鉄矢会長】　はい、ありがとうございます。

では、次に実施状況についての報告をお願いします。

【大野学芸員】　その前に、今の入館者数のデータに関して、私から委員の皆様にお聞きしたいんですけれども、今回もこのデータを出すに当たって、事務局のほうでどのようなデータにしたらいいのか、どれぐらいまで詳しい数字が要るのかということでちょっと悩んだんですけれども、ご希望といいますかご指摘があれば、例えば今の日数でいきますと、開館日数をどこかに入れてあったほうがいいとか、開館日数で割った１日の平均入館者数が入っていたほうがいいとか、グラフがいいとか、そういうふうに委員さんのほうで何かご希望がありましたら、こちらのほうの資料づくりに反映したいと思うんですけれども、その辺はいかがでしょうか。

【鉄矢会長】　まず私から発言してよろしいですか。

【大野学芸員】　はい。

【鉄矢会長】　今会期日数を知りたいです。人数だけで見てしまうともったいないので、会期日数を考慮して、３０日当たりにするなど比較しやすい形にしていただきたい。

【事務局天野】　　実は内々で今学芸員のほうが申し上げた、どういうふうにどこまで皆さんにお示しするのが良いかということで協議をしていました。今回とりあえずお示しをしているんですけれども、実はここに、月ごとの開館日の数字が入っているのがあります。前回までは図録だとかはがきだとかそういうものも全部出していたんですけれども、展覧会を開催するたびに図録だとかそういうのが増えていくものですから、正直な話、それを全部皆さんにお示ししてもわからないんじゃないかなと、かえって混乱してしまうのではないかということで、学芸と相談して今回入館者数だけということに絞ってお出ししたということでございます。次回、これをもとに月ごとの開催日の平均も出していますので、それらとか、あるいは展覧会ごとの入館者数の平均だとかそういうものもお示しできますので、次回からそういう形でお出ししたいと思います。

【鉄矢会長】　　はい。

質問を続けさせていただきます。

このはけの森美術館が目標としていた子供に対する教育のような部分があったと記憶しています。また無料と有料を分けるというのは、美術館の中での予算の話がありますけれども、子供と大人の割合、有料・無料関係なく子供に対してどのぐらい興味を持てる企画を打てたのかなどが見える形であったりすると、この美術館の目標としているところに合致しますね。「あっ、こういう企画をやって少しずつ努力しているのか」とか、「ほかの美術館より子供の量が多いね」とか、何かそんな視点が見えたら興味深いのだろうと思いました。このままの表だと、わかりにくい。

【事務局天野】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　ここに小学生が入てしまうのですよね。

【事務局天野】　　入ります。

【鉄矢会長】　　折角の取り組み成果が見えずもったいない気がします。大切にしたい部分を増やそうというのが、美術館の成果としても欲しいところと思います。

それと所蔵作品展Ⅰとか所蔵作品展Ⅱとか今後も続くと思うので、できたら大まかなのでいいですが。２００７年の所蔵作品展はどうだったのか（毎年伸びているのか、まあそんなにぐんぐん伸びるとは思っていませんので）微々たるところでいろいろな努力が実を結んでいるような格好が見えると、

年度で、市役所は単年度ですけれども、美術館は僕は単年度ではないと思っていますので、長い目で見たものの視点でこういうものを見られたらいいなと思っております。

では宮村副会長、お願いいたします。

【宮村副会長】　　そんなに細かく出していただかなくても大丈夫かなというのと、先ほど言われた４日と５日の無料開放日がすごく人数がたくさん来館しているんだなというのがあるので、その辺をもう少々強調されてもいいのかなと思います。以上です。

【鉄矢会長】　　では、引き続き事務局のほうより実施状況についてお願いします。

【大野学芸員】　　では実施状況、内容のほうについて学芸のほうからお話しさせていただきます。資料１をごらんください。

まず、前回の委員会でお話ししたところ以降の今年度実施済みの内容について話ししたいと思いますので、所蔵作品展Ⅱ「中村研一、画家のまなざし」からです。

この中で企画したこととしましては、まずギャラリートークとミュージアムツアー、これを毎週土曜日と日曜日、両方とも午後２時から毎週行いました。その結果、会期中計１４回のうち実際には１２回実施しました。当日その時間に人がいらっしゃらない場合は、なしになっています。１２回実施して合計１４名参加です。そのほかの団体でいらした観覧者の方などに、イレギュラーでこちらから「ギャラリートークできますけれども」というふうにお誘いをしたものが４回ございます。そちらが計４９名参加されました。

それともう一つ、日曜日にしましたミュージアムツアーは、ギャラリートークがどちらかというと作品解説に近いのに比べて、ミュージアムツアーのほうはワークシートを使いまして、子供さんでも一緒に話ししながら楽しんでできるような、ちょっと内容を変えたものにしています。こちらが計１４回のうち７回実施で４３名参加。ほかに夏休みは特に中学生が多く来たんですけれども、中学生にこちらから「ワークシートがあるけれども一緒にやっていかないか」というふうな声かけをして、臨時に実施したものが４名参加がありました。こちらは神津が担当したんですけれども、参考に今日持ってまいりましたので、今お席のほうに回しますので、ごらんください。

あと、市政施行５０周年記念に絡めまして、金曜日は毎週模写ができるよ

うにしました。これは以前模写のワークショップをしたときに非常に人気でしたので、もう一度企画したものです。計１４回金曜日があったんですけれども、そのうち実際に模写をしたいといらしたのは２回分、計７名でした。あと金曜日ではなかったんですが、模写があるのを知っていて「ぜひやりたい」というような声があったので、臨時に実施したものが１回あります。合計で９名参加されました。下に参考までに写真を載せたんですけれども、参加した方にはほんとうに好評で、あと全国的にも珍しい試みだと思いますので、今後も続けていきたいと思っております。

あとこの時期に創作系のワークショップとして、「『けんぼしゃん』とあそぼう～コラージュでアートを楽しむ～」、こちらは神津が担当しました。８月３日日曜日、１０時からお昼を挟んで３時まで、１日がかりで実施しました。１６名の参加、そのうち大人が６名、中学生から幼児まで含めて１０名、合計１６名の参加でした。写真で紹介しておりますように、２階の会議室と１階の中庭と２か所に分かれて実施しました。スタッフとして、学芸員のほかにはボランティアスタッフとして東京学芸大学の学生が１名、あと市民の方で、以前美術館で臨時職員として働いてくださっていた方が手伝ってくださったという形で実施しました。こちらも非常に子供たちが楽しんだようで、今後続けていきたいと思っている、継続してまたやっていきたいと思っている企画です。

あと講座、こちらは創作系ワークショップではなくて、勉強系といいますか講座です。こちらは残念ながら３名ということでちょっと参加者は少なかったんです。その分わりと密に話して、実際に中村研一あての手紙ですとか、中村研一自身の手紙なんかを手にとりながら読むことができました。まだまだ手紙はありますし、初めての実施でこちらもふなれなところがありましたけれども、そういう経験を生かしてもう一度やってみたい企画です。

次が先ほどからお話がありました特別無料開放日です。２日間で合計３６３名いらっしゃいました。確かに私たちもびっくりしました。そんなにしっかり広報していたわけではないんです。ポスターに少し入れていたのと、あと市報で市制５０周年記念の欄で、参加施設として何回か載せていただいただけだったので、これほどいらしてくださるとは予想していなかったです。

【鉄矢会長】　沢山の人が美術館にいる様子はどんな感じですか。

【大野学芸員】　親子でいらっしゃる方が多かったですね。

【神津学芸員】　　ちょうどポスターを、この会期最後なので「ご自由におとりください」ということで、余っているポスターを全部提供したんですね。それが大体５０本ぐらいあったんですけれども、それがほんとうにきれいになくなって、皆さんに楽しんでいただきました。

【鉄矢会長】　　常時１０人ぐらいはいた感じですか。

【神津学芸員】　　１０人以上ぐらいですね。途切れることがなくずーっと入っていかれて。もう知っていて「５０周年なのね」というふうにいらしたお客さんがほとんどだったので、それはかなりすごいこと、注目してくださって来てくださるということがわかりました。

【事務局天野】　　私は当日は非番でいなかったんですけれども、過去の入館者数で８０人ぐらい入ったときは、常にお客様が中で見て回っているという状況でしたから、２００人とかという状況であれば……。

【鉄矢会長】　　渋滞していたとか。

【事務局天野】　　もうそれこそ芋を洗うといってもいいぐらいにお客さんが入っていたのではないかと推測できます。

【鉄矢会長】　　一方で、入ったのはうれしいんですけれども、見て楽しめたのかどうかというのが、印象が――議事録に書かなくていいですよ――印象が気になるんですけれども、いっぱい込んでいて見たい絵がゆっくり見られなかったとか、意外に小さかったとかいろいろな印象を持たれて、人が来ればいいだけじゃなくて、人が負の情報を持って帰っていっちゃうとすごく怖いのかなと、ちょっと見ていて、それでちょっと様子を聞きたかったんですね。

【大野学芸員】　　そういう感じはなかったですね。ポスター無料配布したということもありますけれども、喜んで帰っていってくださったり、受付のほうでも会話をして、そんな感じでした。

【神津学芸員】　　「来ようと思っていたの」というお客様が多かったです。これがきっかけになって足を運んですごくよかったというか。あととてもよかったのが、次回展覧会が企画展だったので、その広報ができたというのが非常に大きかったですね。このときにはどんどんチラシをすべてお渡しできて、「次はこれです」というふうにご案内できたので、すごく「また来ます」というお客様が多かったと思っています。

【大野学芸員】　　団体や免除で入った団体がどれぐらいいたかというの

が次で挙げてみました。教育委員会生涯学習部の「シニア世代のための地域参加講座」というのがありまして、こちらは１６名が団体でいらっしゃいまして、免除申請がありました。あと「中東和平プロジェクトin小金井」実行委員会というのがありまして、そこでご招待したイスラエルとパレスチナの高校生９名と、地域の日本人高校生６名の団体が来ました。あと商工会ですとかこちらは減免対象ではなかったんですけれども、わりと常設展、所蔵作品展でも団体でいらっしゃることは多いです。このときは小学校の団体はなかったです。ただ夏休みがありましたので、小学生、中学生、高校生含めて、大学生も宿題のために来るという人が多かったので、今後何か宿題対応講座みたいなものを打っていってもおもしろいかなと思っています。内訳は市内の特に近くの二中ですとか一中ですとかもちろんなんですが、ほかにも武蔵野市ですとか、あと西東京、田無とか少し遠くのほうから来る中学生もいました。

他に小学生がユニバーサルデザイン調査の宿題のために来たということで、「ユニバーサルデザインのあるところの写真が撮りたいです」とかいろいろなものがありましたので、ご報告します。

【鉄矢会長】　すいません。数名というのは数えられなかったことなのか、４名、５名のことを数名というのか。

【大野学芸員】　数えられなかった日もあります。

【鉄矢会長】　それは数えられない日というのはどういう原因で？　一、二名とか数名のときだと数えられない理由がよくわからないので。

【大野学芸員】　例えばチケットは小中学生一緒に子供チケットですし、小中の別はカウントはしていないんです。でも今後こういうことをご報告したりとかということもありますし、こちらも把握したいということで、受付の方に「可能な限りでいいのでメモをしてください」というふうにお願いをして、日計表のメモの欄に書いていただいているんですね。そのときにきっちり数えられた日と、てんやわんやで大体数名とか、あと多数とか、そういう印象でしか残らなかった日とあるんです。

【鉄矢会長】　数名と多数の差が何だろうと思いながら、わかりました。

【大野学芸員】　申しわけないです。

【鉄矢会長】　いや、これは数字としてはおもしろいですね。この美術館らしいものが出てくるとおもしろいですね。はい、すいません、途中で。

【大野学芸員】　　次にアンケートですけれども、Ａ５の小さなアンケートが館内に置いてあります。回収率はあまり高くないです。ただ幾つか回収がありましたので、まとめた形でご紹介しました。大体そういうアンケートに書いてくださる方はいいことを残してくださる方が多いんですけれども、苦情といいますか批判的な意見を書いてくださるもので多かったのは、「もっと上手にＰＲをしてください」ということですとか、空調に関して、同じ設定でも「暑い」という方と「寒い」という方が、「空調が何かむっとする」とか「空調がうまくいっていないんじゃないですか」というような苦情は時々いただいています。

あとアンケートとは別に自由形式で書いていただける感想ノートをロビーに置いています。そちらのほうがどちらかというとたくさん書き込みがあります。日にちを打っていますので、月ごとにこちらはご参考までに書きました。後でご確認ください。感想ノートのほうはほとんどいいことが、好評のものが多いんですけれども、先ほどもお話がありましたように「人が少なくてゆっくり見られてよかった。」という感想もわりと多いです。ほかにも施設の印象、「森に囲まれたこの美術館というのがすばらしいところですね」というようなものがわりと多いです。

以上がこの所蔵展Ⅱ「画家のまなざし」のご報告になります。

このまま続けてよろしいですか？

【鉄矢会長】　　はい。

【大野学芸員】　　次が今開催中の企画展、「松本市美術館田村一男記念室より　冬の彼方に～高原の画家田村一男の世界～」という展覧会です。この中でまず「スペシャルナイト！　直弟子金山桂子さんが語る田村一男と信州・冬」という講座を１１月８日土曜日に開催しました。時間が午後５時１５分～６時２５分ということで、初めての夜間延長開館です。定員が４０名ということにいたしました。講師には金山桂子さん、女子美術大学の名誉教授、光風会理事、日展評議員などをされています。これを市報、ホームページ、チラシ裏面などで広報しました結果、定員を超えて４３名の参加がありまして、館内のいすをかき集めて、１人、２人立ち見の方もいらっしゃるような形で開催しました。当日は小金井市のキャンドルナイトとたまたま重なりまして、はけの道は野川のキャンドルロードに向かうルートにありましたので、キャンドルナイトの実行委員会のほうから協力依頼を受けまして、美

術館の前にもキャンドルを設置しました。その結果多くの人が美術館の前を――あれは２万人でしたか、公式発表は。

【事務局天野】　　２万５，０００人とのことです。

【大野学芸員】　　２万５，０００人がキャンドルナイトで、キャンドルロードのほうに行ったそうなんですけれども、そのほとんどの方が美術館の前を通ったと思われます。美術館の前には竹を割ってあしらったようなキャンドルが設置されまして、絶好の撮影スポットにもなっていまして、かなり宣伝効果があったんじゃないかと思います。たまたま夜間延長開館でもあって、美術館はあいていて人が集まっていたというのもあり、にぎやかな雰囲気でした。

こちらの講演会に参加された方のアンケートは、回収１２名、こちらに書いてありますように、年配の方が多かったです。それから光風会の関係、あるいは田村一男のご遺族の関係者の方、知人の方が多かったです。でも、市民の方もたくさんいらっしゃいました。というのは市報に載った直後に申し込みの電話がかかってくるということもありましたので、実際はもう少し市民の方が多かったです。参考に写真を載せてありますけれども、展示室内にいすを並べて、そのかわり一般の方は入れない、この講座に参加する方だけのための夜間特別延長という形で講演会をいたしました。

それから次のページですけれども、スペシャルゲストトークとしまして、今回作品をお借りしてきた松本市美術館で田村一男記念室を担当してらっしゃいます武藤美紀学芸員にゲストとして来ていただいて、ギャラリートークをしていただきました。こちらがそのお写真です。

ほかに毎週日曜日、ミュージアムツアーをしました。これは神津が担当しました。ワークシートがありますので参考にごらんください。

あと、その次ＡＭＥＸ研究会フィールドワークというのがありますけれども、これは慶應義塾大学アートセンターでアートマネジメント講座を受講している学生たちのＯＢの方たちで今アートマネジメントにかかわる仕事をしている若い方々の研究会です。これが「フィールドワークのミニケースとして、ぜひはけの森美術館を選んで研究会をしたい」ということで申し込みがありまして、対応したものです。１１月１日土曜日に展覧会を見て、そこで臨時に実施したミュージアムツアーに参加して、その後本庁会議室に移動して、この研究例会に学芸員と鈴木係長が出席しました。こういう申し込み

があるというのも、とてもうれしかったです。

あと、この企画展には市内小学４年生の団体鑑賞が２校から申し込みがありました。一小と四小の全４年生が順々に来館し、団体鑑賞をしていきました。こちらが実際の日付と人数などです。

小学校４年生の鑑賞教育には力を入れています。初年度のアートフル展も小学校４年生が対象でしたし、２年続けた結果、先生方のほうから「４年生なんですが、今年もできますか？」というふうなお話があったので、これは続けていきたいなと思っています。

最後にこの展覧会に関する広報や取材などなんですけれども、ここに挙げております新聞やテレビ、それから取材――取材ではなく広報として広告が載ったものは省いていますけれども、主に記事になったものを中心にここに書いています。特に１１月２３日にはＮＨＫの「新日曜美術館」のアートシーンで放送されまして、やはりこれは反響があって、翌日から増えました。

【神津学芸員】　　当日からです。

【大野学芸員】　　あと、この展覧会に直接関係あるわけではなかったのですけれども、企画しました創作系ワークショップがあります。「アートエコバッグをつくろう！―江戸東京野菜でお絵かき―」で、これは神津が担当しました。「江戸東京野菜を味わう第４弾　秋の小金井衣食住散歩」ということで、江戸東京たてもの園と小金井市が主催する行事がありまして、そちらの委員会のほうから協力依頼がありまして、市民参加ワークショップの１つとして美術館も参加しようということで企画をいたしました。１１月３日朝から夕方まで全４回に分けて１５人ずつ募集し、合計６０名の定員で実施いたしました。広報直後からすぐ申し込みが入ってきまして、二、三日中で埋まったという形で、実際には６５名の人が参加しています。講師には西村和弘さん、有限会社エニシングの方なんですけれども、これは美術館の近くにあるおむすび屋Wa Gayaさん、そちらのほうの……。

【神津学芸員】　　母体になっている会社が帆布で前掛けを製作していたり、Ｔシャツをつくっていたりという感じで。

【大野学芸員】　　オリジナル前掛けをつくったりとかしているところで、こういうエコバッグをつくったりするワークショップの経験があると、そのための絵の具ですとかも提供してくださるということでご協力を得まして、開催しました。こちら、参加者の方にはプレゼントとして当日エコバッグと

――参考にこちら当日使っていたエコバッグですけれども――それと江戸東京野菜、実際野菜を１つ持って帰れるということで、あの大きな大根をこれに入れて子供たちは帰ったりしていました。開催中の「冬の彼方に」展覧会の招待券を１枚プレゼントいたしました。

あとオプションとしてミュージアムツアーを午前と午後１回ずつしました。こちらは子供も多いですし、人も多いということで、スタッフ９名で実施しました。学芸員のほかにボランティアの方が７名来てくださいました。東京大学の学生が２名、あと講師である西村さんの会社、エニシングの方が１名、あともう一人。それから市経済課の職員、コミュニティ文化課の職員、スタッフの知人などを含めました計９名のスタッフで実施しました。下に写真がありますけれども、非常に好評でした。ご参考までにお配りいたしますので、後でごらんください。

こちらは日本農業新聞から取材がありまして、今日持ってきております。

【神津学芸員】　江戸東京野菜全体についての記事なんですけれども、最後の文のところに、「特に人気を集めたのははけの森のワークショップだ」というふうに載っていました。

【大野学芸員】　こちらは美術館が、たてもの園ですとか、あと小金井市の経済課ですとか、地域の方と連携してワークショップを進めていく初めての経験になりました。

以上で今実施済みの今年度の事業の状況についてご報告を終わります。

【宮村副会長】　今のこれは入館料だけなんですか？　有料だったんですか？

【大野学芸員】　ワークショップとかですか？

【宮村副会長】　はい。

【大野学芸員】　入館料だけです。

【宮村副会長】　あっ、そうですか。

【神津学芸員】　江戸東京野菜に関しては入館料もなし。

【宮村副会長】　あっ、入館料もなし、ああ、そうなんですか。

【神津学芸員】　はい。エコバッグのこういう使うものに関しては、経済課からの支援が出ていまして、インクについてはエニシングさんからの無料提供ということで。館内に入るものではないので、チケットもおつけして、チケットもプレゼントして、そのチケットは当日使ってくださってもいいで

すし、別の日に持ってきてくださったらまたどうぞというふうにしてやっておりました。

【宮村副会長】　　いいですね。

【鉄矢会長】　　これは、また変な表で、表の入館者数にカウントされたものなんですか、こういう……。

【大野学芸員】　　これは実際に展示室に入った方はカウントしています。

【鉄矢会長】　　あっ、そう、そんなに細かくやっているんですね、そうか。

【神津学芸員】　　中庭でやっていたので、中庭から展示室に入る場合は受付でチケットを切って。

【大野学芸員】　　お渡ししていたチケットを切ったもらうことにして、それでカウントしました。

【宮村副会長】　　それも無料ということですよね。

【大野学芸員】　　はい。

【宮村副会長】　　ああ、そうですか。

【大野学芸員】　　大きな施設の美術館ですと、例えば展示に行く方は展示室の前でもぎりで切っていますよね。それとは別にワークショップの部屋ですとか講義室とかがあって、そっちに無料のゾーンがあります。そういうふうに当館はなっておりませんので、どうしようかと悩んだ結果、やはりそういう無料で参加できる、展覧会を見るわけではないワークショップの場合は無料にして、入られる場合は再度受付を通っていただいて切るという形にしました。

【鉄矢会長】　　こういう参加者の成果というのは、どういうふうに記録として、その人数とか、今後もこういうワークショップみたいなのを、中に入らなくても学芸員の方が外に出ていくけれども……。

【大野学芸員】　　そう、外でやることもありますよね。

【鉄矢会長】　　いろいろなものが出てきたときに、今こういう運営協議会の資料が出てきたというのは、これは入館者数調べと、もう一個、外のこういうものをやるとだんだんこういうのが増えてくるよという数字も、もしかしたらあったらいいかもしれないですね。

【大野学芸員】　　確かに今後例えば野川のほうに出てやる、館外でやるワークショップなんかあるかもしれませんし、そういうときの参加人数をどう

表現して反映するかですね。

【鉄矢会長】　　どういう把握をして反映するかですね。反映して、やっぱりそれも成果ですものね、美術館が行う教育普及活動ですよね。

【事務局天野】　　今回エコバッグのイベントをやるに当たって経済課と整理した経過がございます。経済課としては東京江戸野菜というのを普及したいという考えがあります。美術館の今の現状では公民館活動ではございませんので場所貸しができないわけです。そうした場合に企画立案をすべてはけの森美術館の学芸員が実際やって、場所貸しとか云々とかというと、いわゆる純粋に美術館に来られる入館者の方とバッティングしてしまうというような部分があって、かなり細かい部分まで経済課と等々調整していました。これは新しい試みということで、今後美術館としての事業としての意味合いと、それから地域の連携の活動の意味合いとかというので、非常に大きな試験的なイベントだったのかなとは思います。

【鉄矢会長】　　外から見ると市がやっていることだから、そんなに調整が大変だったというのは思えないですが、市民側から見るとそうだと思うんです。

【事務局天野】　　経済課の観点というか、美術館以外のいわゆるコミュニティ文化課とかはけの森美術館以外の行政サイドから見ると、同じ行政の中で場所を貸してくれるとかのニーズがあって、至極当然な形で感じると思うんですけれども、美術館そのものは場所貸しをする場所ではないので、そこの辺の考え方をまず改めてもらった上で、イベントの企画を詰めていったというような実態がありました。どういって説明したらいいのかというのがあるんですけれども……。

【鉄矢会長】　　「学芸員の目の黒いうちは、ここではだれにも貸せないよ」じゃないけれども、何かそういう意味のある程度の美術館としての……。

【事務局天野】　　いわゆる美術館としてのポリシーを守りながら、かつ地域の連携でどうやっていくかという部分での、一つの大きな試みだったのかなと思うんです。

【鉄矢会長】　　美術館が市のものなのに地域連携というのは、すごく変な感じがするんですけれども。でもそうなんじゃないですか、よかったと思いますよ。

【宮村副会長】　　これを見る限りでは、すごく大成功したのではないかな

と思いますけれども。

【大野学芸員】　　実際企画を一緒に考えていくというのはあったんですね。ワークショップや展覧会について時々「こういう展覧会をしたいんだけれども、場所は借りられるか。」とか「こういうワークショップをしたいんだけれども、そちらの美術館でできますか」というお問い合わせがあります。そういうものに関して「自主企画をしている美術館です。」「貸しギャラリー的なことはしておりません。」というふうにお答えしているのですけれども、そういうものとの区別が今回ちょっと難しかったんです。それでもやはり今後も、すべてお断りするのではなく、美術館の方向性とすごく合致しているような企画がありましたら、じゃあ一緒に考えましょうということで、学芸も加わって企画をしていくということはあるんじゃないかと思います。

【鉄矢会長】　　そのためにはこの「『けんぼしゃん』とあそぼう～コラージュでアートとを楽しむ」も、あとエコバッグをつくろうも、もしかしたら１行でいいですのでねらいと目的があると、すごく今後ストックしていくときに、ねらいはこれ、目的はこれ、ねらいと目的はこれだったのねというのが確認できると、「ああ、美術館の筋から外れていないね」というのが――そうですよね？

【大野学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　今のお話にちゃんとあったのに、記録が残らないのはもったいないと思います。「けんぼしゃん」のほうは多分コラージュでアートを楽しむのが目的となって、タイトルと同じことになっちゃうんでしょうけれども、タイトルと同じでも僕は構わないと思うんですね。ねらいと目的は何だったんですかと聞かれたときに、こうだったんですという話が常について回ると思いますので。

【大野学芸員】　　企画書のほうではそういう目的やねらいを書いておりますので、この委員会に出す資料の中でも、そこから一文入れて皆様にご説明したいと思います。

【鉄矢会長】　　はい、わかりました。

実施状況についてのご報告をいただきましたけれども、途中途中で質問をしました。ほかにまだ質問し足りなければ。

【宮村副会長】　　今回すごくきれいにまとめてくださって、写真も入っていてすごく内容もよくわかり、大変だったなと、ご苦労さまでしたという気

持ちです。

【鉄矢会長】　　私ちょっと事前の打ち合わせで、学芸の方々が運営協議会の方に理解してもらう、もっとわかりやすく理解してもらいたいという工夫が出てきていたので、すごく私も「あっ、こういうこと」というのがずっとわかってきて、ここは要するにここは非常にいいと思います。傍聴者の人がいてもよかったと思うんですね。

【宮村副会長】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　では、１の（２）平成２１年度の予算編成の変更点について、事務局のほうから説明をお願いします。

【事務局天野】　　この資料、名目的におつけしています。実は平成２１年度の予算編成を今やっている状況でございまして、来年の３月か４月に選挙があるということで……。

【小柳委員】　　３月です。

【事務局天野】　　通常の予算編成と比較して１か月以上早いという状況がございます。それで今予算編成をしている最中なんですけれども、２１年度の予算編成において、昨年度までの予算編成と比較して大きな変更がございました。その内容を皆さんにご説明しないとわかりにくいかなということで、このメモをつけさせていただきました。中身はこれを読んでいただくとわかると思いますが、小金井市の予算は１次経費、２次経費、３次経費という３つの経費に大別されまして、市民部において平成２１年度から１次経費の部分が枠組み予算ということになりました。この枠組み予算というのが、２番目として事業費の大半が１次経費に含まれるということでございます。ちなみに２次経費の部分というのが主に人件費、それから３次経費というのが政策的経費ということになります。

それで２１年度の予算編成において、市民部各課には平成２０年度当初予算額の１次経費の分が、枠として割り当てというか、いわゆるその分については確保すると、だから２０年度の市民部全体の中の１次経費分の中で市民部の各課は調整して、その枠の中でおさめなさいという指導が来ています。しかし平成２０年度、今年度の予算というのが、実は当館が平成１８年４月に開館して以来、年間通じて企画展が２本、所蔵作品展が２本ということで、合計４回の展覧会を１８年度、１９年度開催してきてございます。それで今年度の予算を組む際に、学芸員全員の退職というのが今年度の予算編成する

段階で予測ができたということと、それから所蔵品目録がまだ私どもできていないものですから、それの調査をするということで、展覧会の回数は４回ということで変更ないんですが、企画展１回と所蔵作品展３回ということで、１９年度と比較して予算額的には３分の１ぐらい、事業費的には３分の１ぐらいになりました。

それで今年度の予算は、１次経費分が大枠で５００万ぐらいの予算枠になっております。先ほど申し上げた市民部の中で今年度の１次経費の中で配分をしてしまうと、美術館の事業が２０年度と同等の額しか来年度できなくなってしまうというようなことから、それだと事業が縮小してしまうよということで館長と部長に相談した上で、いわゆる現状がこうだよということと、企画展を２本、それから所蔵作品展２本ということで本数は変わらないんだけれども、１９年度の枠、あるいは１８年度の開催した内容にレベルアップしますよということで理解してくださいというようなことを相談していただきました。それをもって市民部各課と財政に折衝した結果、企画展Ⅰ、それから所蔵作品展Ⅰ及び所蔵作品展Ⅱの３つの分については１次経費の配分の中で調整する、それから飛び出る企画展Ⅱの部分については３次経費に計上して、市長の政策的経費の中で判断してもらうということで、市民部各課とそれから財政課のほうに内容を理解していただいて、そのように予算要求をしているという状況でございます。

この点がわからないと、次、大野のほうから２１年度の事業を説明する際にちょっとわかりにくいかなということで、この点については説明をさせていただきました。

長くなりましたけれども以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

去年は美術館として予算を持っていたものが、市民部各課を１つにまとめて枠という名前にして、枠組みの予算として落ちてくるというご説明でしたね。

【事務局天野】　　その額が２０年度、今年度の予算の範囲の中は確保するよと、いわゆる……。

【鉄矢会長】　　それでそれが今年度の予算と同じようにやるから、その前にやっていたような４回ペースの予算はもらえていない。その４回ペースにもう一回戻すために今回は１次経費というので３本、で、１本はまたこの

第３次経費というので今ねらっているというご説明でした。

これについてご質問はありますでしょうか。

【宮村副会長】　　わかりました。

【鉄矢会長】　　わかりましたか、はい。ではそれに関して、（３）平成２１年度の事業について、来年度の事業についてお願いします。

【大野学芸員】　　では学芸のほうから説明させていただきます。

まず、２１年度のというよりも今後の展覧会スケジュールとしました。といいますのも、あと２回分は平成２０年度分の予算だからです。最初のほうに下線を引いて（平成２０年度予算分）と書いてありますが、これであとまだ所蔵展を２本いたします。そちらのほうのご報告を今までまだ一度もしておりませんので、まずそちらのご説明をしたいと思います。

所蔵作品展を２本ですけれども、その前に括弧書きをいたしましたが、今の展覧会が終わりましてから１２月８日から年を明けて１月５日まで、少し長目の臨時休館をいたします。少し長いんですけれども、例年ですと１２月の終わりのほうに一度開館しているのかな、去年は。

【宮村副会長】　　去年はしていない。

【大野学芸員】　　していない、年を越えてからしましたっけ？

【事務局天野】　　はい。

【大野学芸員】　　あっ、そうですか。

どうしようかと協議したんですけれども、長期の休館にします理由として、展示替え作業というのはやはり学芸員２名で必ず行う必要があります。しかし今の企画展の作品返却、あるいは中村研一作品の調査研究のために出張がございます。なので２人そろって行える日数が少ないということと、あと当館は森に囲まれておりまして非常に落ち葉が多いんですが、今この時期に必ず定期清掃を入れないとほんとうに落ち葉だらけになってしまうということで、清掃が入ります。あと館内バックヤード、倉庫ですとか書庫ですとかそういうものが非常に少ないんですね、少ないというかないんですね。そのためにこれまで刊行してきた展覧会の図録や何かの在庫分を収納するスペースがありません。今までいろいろ場所を探して仮置きしていたんですけれども、ちょっとあふれてきておりまして、一度ここで整理しないといけないということで、そのような作業を行う結果臨時休館が増えまして、年明けから新しく所蔵作品展を始めます。

年明けですけれども、２００９年所蔵作品展Ⅰ、こちらは神津が担当いたしますので、内容については神津のほうから説明いたします。

【神津学芸員】　　皆様にはチラシができ次第送付することになるんですが、中村研一が「人間の顔に表情がなければつまらないのと同じで、絵画にも生き生きとした感じがなければ」ということを言っておりまして、それは研一が「ラ・ヴィ」というふうに、フランス語で生命とかいうんだそうなんですが、そういうふうに表現しているので、そういったことで裸婦に代表されると書いてありますけれども、特に裸婦ばかりを集めているわけではなくて、生命力のあふれた絵を並べて研一の絵画論ですとかそういったものに注目してみようかなと思っています。所蔵の代表作を並べる常設コーナーというのも準備いたしていて、今展示室の中では２枚壁が出ているんですが、それを１枚壁を出す形にして、少し企画展とのめり張りをつけようかなと思っています。

以上です。

【大野学芸員】　　こちらを３月８日までしまして、その後３月９日～３月２３日までが展示替えその他のための臨時休館に入ります。今年度の運営方針の中にありました所蔵作品目録作成、そのための作業というのをここで進めたいと思っています。特に作品の撮影はまだフィルムがない作品もございますので、そういうものの撮影をしましたり、休館中でしかできないような作業をここで進める予定です。

そういう作業は展覧会開催中も少しずつ進めていきたいと思っていたんですけれども、やはり週４日勤務体制の２名の学芸員というような状況では、会期中にはなかなか進みませんので、やはりこうやって一たん閉めて集中的にやらないと進んでいかない、いつまでも目録ができないというようなことを相談しまして、長期の臨時休館に入ることにいたします。

あと２００９年所蔵作品展Ⅱですけれども、こちらは例年どおり年度をまたぐ形の３月２４日～６月７日です。今のところ考えておりますのは花の絵を特集展示しようと思っております。初年度の２００６年度も春に一度花の特集展示をしたことがあるんですけれども、やはり中村研一は花の絵が多いということと、あと来館者の方もやっぱり春ですから花の絵が多いということでご好評をいただいていたので、前回とはちょっと違う形でもう一度花の展示をしていけたらと思っております。

あと次のページですけれども、こちらからが来年度予算分で今考えている分、予算要求をしている分の展覧会です。先ほどからもお話がありましたように、２１年度は企画展２本、所蔵作品展２本でいく予定です。

まず企画展ですけれども、企画展Ⅰは京都府立堂本印象美術館展、松本市美術館からお借りした田村一男展、それに続く全国の美術館のコレクション紹介展のシリーズ第３弾として考えています。浜松市美術館にガラス絵のコレクションがあります。それを紹介する展覧会をしたいと考えております。ですので、このコレクション紹介展は今まで秋にやってきたということもありますから、やはり今回もこれは秋の時期に設定したいと思っています。日数が４５～６０日とありますが、これは展示室監視員の方の賃金の予算がどれだけ取れるかによります。今までは６０日の要求でしたが、４５日が予算化された分でしたので４５日だったんですね。今回も６０日を要求していますが、実際何日になるかはまだちょっとわからないです。

この図録が浜松市美術館のコレクションですけれども、中国や日本の伝統的なガラス絵から近現代作家のまで含めて幅広いコレクションがありますのでそれを紹介していきたいということと、あとガラス絵を描くワークショップなども実施できればと、あまりガラス絵ばかりの展覧会ってそんなにないと思うんです。すいません、図録をご回覧ください。

あともう一つが企画展Ⅱなんですけれども、こちらは神津が担当いたしますので、神津のほうから簡単にご説明させていただきます。

【神津学芸員】　　大岡昇平という小説家が、非常に当館ゆかりの小説家として名前がよく皆さんも聞くかと思うんですが、実は来年生誕１００年ということで、『武蔵野夫人』という小説があるんですが、ちょうどそちらの舞台になっているのがあそこの野川ということで、よくこちらの美術館でもお客様のほうからお声がかりがあったりするんですけれども、その映画「武蔵野夫人」を主演している女優がまた実は同じ生誕１００年ということで、特に田中絹代さんと大岡昇平さんというのがつながりがあったというわけではないんですが、この「武蔵野夫人」ということで少しゆかりのものができるのではないかと思っていて、少し企画をしているんですが、予算が取れるかどうかということも微妙です。

ただ、予算が取れなかったとしても、例えば映画の上映会はワークショップではないですがイベントのような形でして、そこに少し田中絹代関連の資

料、ポスターですとか写真のパネルですとかを展示するという形で、何かできたりもするのではないかと思っています。あとは田中絹代メモリアル協会の方と少しやりとりをしているんですが、ちょうど生誕１００年に合わせて下関市、田中絹代の出身なんですけれども、そこの下関市に記念館が設立される予定だということで、そういったことでも少し彼女自身を紹介するということで何かできたらなと思っています。台本等残っていたりするので、その台本を読んだりですとか、あと『武蔵野夫人』の小説自体を少し読む講座にしてみるということもできるのではないかなと思っています。今日、資料……。

田中絹代と言われても難しいかもしれないですが、これがメモリアル協会のほうでつくっている資料でございます。田中絹代賞という映画賞があるんですけれども、世界的に見ても女優の名前が冠についている賞があるというのはすごく珍しいと思って。また彼女自身もアイドルのような女優から、年老いてからもスクリーンに出ていて、しかも映画監督にもなっているという、かなり現代的な女性としても紹介できるんじゃないかと思っています。

【大野学芸員】　所蔵品目録をつくるための調査に重点を置くという方針は変わっておりませんので、そのためにも企画展が１本、所蔵展が３本で、そうやって企画展を減らした分、目録作成のための作業や必要経費のほうに費やしていきたいと当初は考えていたんですけれども、ただこの生誕１００年ということがわかりましたので、そうするとこれは今年しかできないものですし、はけの森美術館としても地元のはけにまつわる文化、芸術について紹介するということはしたいですので、ぜひ今年これを１本したいということで、今学芸から企画を出しています。

【神津学芸員】　来年……。

【大野学芸員】　あっ、来年ですね、すいません。

【薩摩学芸顧問】　顧問という立場から、企画展に関しては若干補足いたしますけれども、このガラス絵というのは目のつけどころとして非常におもしろいところで、もう今はあまりはやらなくなってきているものなんですが、単純に言いますとガラスのついている額、そのガラスに絵をかいたと思えばいいわけですね。ところがそれを上からかいたんじゃあ全然おもしろくないわけです。ガラスの触感というか感覚が出てつやが出るためには、裏からかかなきゃだめだと。ということはどういうことかというと、絵画というのは

単純に言うと、一番基本的なかき方というのはまず遠景をかいていくんですね。それからだんだん近景を何だかんだしてかいていくと、そういう感じのものですね。そして最後にこの辺にサインを入れると、基本的には遠景から近景、大体上から下へ。ところが裏にかきますから、まずサインから書くわけですね、それも逆に書くわけですね。そして近景からだんだんかいていって、最後に遠景をかいていくという非常に特殊な技法で、それで油絵を使ってもアクリルを使ってもテンペラを使っても、とにかく絵にすればということで、非常に伝統的に大変おもしろいものなんですが、今は廃れてしまっているので、たまたま浜松がこのコレクションを持っておりまして、また浜松がいいことをやっていまして、若いころのいろいろな画家にガラス絵をかいてもらっているんです。その絵をかいた画家が、全員とはいいませんが後年結構大家になりまして、そういったものを持っているということもありますので、技法的にもおもしろいものであまり知られていないものなので、これを紹介して、ついでに額縁を買ってきてガラス絵のワークショップを開けば、浜松のほうにガラス絵をちゃんとかける学芸員がいますので、そういうことをやると全く知られていない、最近忘れられているものなので。といってそんなに高度な技法じゃないので、おもしろいかなということです。

それから『武蔵野夫人』のほうは、これも学芸員が見つけてきたんですけれども、我々のおじさん的な立場からいうと、この映画のできとかふできとか賛否両論いろいろあるようですけれども、それは我々が余計なことを言う立場ではなくて、若い学芸員の感性、新たな視点でこういうものをやっていただければ、この１００年ということもありますし非常におもしろいもの、美術館でこういう企画を実行するにはかなりテクニカル的にはいろいろなことが出てくると思いますけれども、それも経験のうちですので、この２つを実行できればと、私のほうでは期待しております。

以上です。

【鉄矢会長】　すいません。ちょっといちゃもんをつけるわけじゃないですけれども、企画展Ｉのところで、全国の美術館のコレクション紹介展シリーズという名前でよろしいんでしょうか。というのは、もう少し丁寧に考えていたはずだと思います。小さな個性的な美術館の持っている何かこういう話があったので、ここをシリーズというふうにつけるのだと、もう少し丁寧につけていただいたほうがいいかと思います。

【大野学芸員】　　申しわけないです。

【鉄矢会長】　　それで、できたらこのせっかく３本目ですので、３本目のときに何となく調査して展覧会を開催したときに、学芸員のほうからこの美術館として３本続いてみて見えてきたものとか、今後の展望みたいなものが僕は聞きたいなと、こういう企画をしているというもののすごさを、やっぱり外にアピールすべきなのかなと思います。

それからガラス絵の手法って、今アニメーションはもうしなくなっちゃったセル画の手法に近いですよね。だからジブリの町小金井としても、そのルーツだとか何とかあるのか僕は知りません、ガラス絵をそういう人たちがやっぱり見ていて、表面がでこぼこしなくて影がないから、アニメのセルというのはそういうふうにつくったほうがよかったのかどうか知らないですけれども、もし絡んだらすごくおもしろいのかなと思っています。

それから田中絹代のこちらのほうは、ぜひ地域連携にもなるだろうなと、商工会さんなんかもできるのかなとか。商工会さんなんかのおみやげに１冊『武蔵野夫人』の文庫本が入って、「これは小金井市役所だよ」とか贈るとか、人に贈るお中元にちょうどいいよとかいうのに、何かそういう経済活動にも絡むようなものも、多分小金井市として生誕１００年をみんなで楽しんでいくというような格好になればおもしろいのかなと。これは美術館だけじゃなくて、小金井市が何も知らないで「ふふん」というのは、ちょっともったいない気がしております。

副会長は？

【宮村副会長】　　別に関係ないですけれども、「武蔵野夫人」っていつごろ上映されたものなんですか。

【神津学芸員】　　申しわけありません。まだ勉強の途中ですので……。大岡昇平が戦後に小説家としてすごく人気が出て、すぐに映画化されて、映画のほうはあまり人気がなかったそうなんですけれども。

【宮村副会長】　　じゃあそんなにヒットした映画では……。

【神津学芸員】　　小説自体は大ヒットを飛ばしたんですね。これはどちらかというと問題作と言われていたようですが。

【宮村副会長】　　それをあえて上映するというか……。

【神津学芸員】　　今それに出ているのか。　　ですので、申しわけありません。

【宮村副会長】　　いえ、いえ、いいですけれども、別に。
【神津学芸員】　　今読んでいるところでございまして。
【鉄矢会長】　　はい、じゃあ続けていただけますか、所蔵品展と。
【大野学芸員】　　あと展覧会に関しては、その後に続けていますように所蔵作品展を２回しますが、１回は夏休みの時期にかぶるようにしたいと。柔軟なワークショップですとか子供、親子向けの企画、あと中学生の宿題や何かに向けたいろいろな企画ができる、しやすいのは所蔵品展ですので、夏休みに１本、あとは例年どおりに年度をまたぐ時期に１本ということで、実際いつの時期にするかというのはこれから調整します。
【鉄矢会長】　　そうすると、一番最初が多分所蔵品展が１回入って、企画展Ⅱのほうが最初に来て、企画展Ⅰが来て……。
【大野学芸員】　　企画展２本の間に１回所蔵展を入れたいんですけれども、続けて企画展のほうをするのはこの２人の体制では大変ですので。
【鉄矢会長】　　あっ、今最終的に６月７日までが所属作品展Ⅱですよね。
【神津学芸員】　　６月７日までのは２０年度なので……。
【鉄矢会長】　　はい。で、その後に？
【神津学芸員】　　その後に企画２本、所蔵２本の予定なんですね。その後の所蔵２本というのが、この下の年度をまたぐ時期で２１年予算。
【鉄矢会長】　　あっ、じゃあこの順番で進むということを考えて？　さっきガラス絵が秋ごろというようなお話だったので、今そこの順序だけでも、別に何月というわけじゃなくて、順序だけをちょっと……。
【大野学芸員】　　順序がちょっと今悩んでいるんですが、企画展Ⅰ、ガラス絵は秋にしたいというのがまず一つありますよね。あと『武蔵野夫人』は１００年記念がこの年ですから、年が変わる前にしなければいけないと。
【鉄矢会長】　　夏休みに１本が所蔵品展、だから所蔵品作品展のⅠとⅡはほぼ決まっているんですね、夏休みに１本と年度をまたぐ時期に１本というふうになっている。
【神津学芸員】　　企画を２本続けなければならないかも……。
【大野学芸員】　　ならないかもしれません。秋から冬という形でやっぱり２本続けるかもしれないです。
【鉄矢会長】　　今ちょっとそこが、見ていて大変そうだなと思ったので。
【大野学芸員】　　この企画展Ⅱのほうがどこまで１つの展覧会としてで

きるのか、予算が決定しないと分かりません。あと最後に※印で書きましたけれども、来年度２１年度もやはり長目の臨時休館を間に挟みながら、所蔵品目録作成のため、特にデータベース化を進めたいと思いますので、例えば企画展が２本続いたとしても、その間に長期の臨時休館が入るとか、そういうような形で進むのではないかと思います。来年度のちょっと新しい試みとして考えていますのが、臨時休館中も完全に閉めてしまうのではなくて、例えば週末などにはこの作品のない展示室、要するに広い空間になるわけですから、そこを使って何かワークショップをしていくというようなことも考えています。

【鉄矢会長】　６、７、８のところが読みにくいスケジュールになっていますね。

【大野学芸員】　どちらにしろ、梅雨どきというのは閉めたほうが作品のためにはいいですので。

【鉄矢会長】　そうすると６月で終わって閉めて、８月で所蔵品展を、８月というか夏休み時期に１本やってということですか。

【大野学芸員】　で、秋に。

【鉄矢会長】　９月に企画展２本か、秋、冬の始まりというところですね。次は年度をまたぐもの……。

【大野学芸員】　最後に年度をまたぐのを１本。

【鉄矢会長】　そうすると企画展Ⅱのほうが頭に来る可能性もあるんですね。

【大野学芸員】　そうですね。準備がうまく進めば企画展のほうを先に。

【鉄矢会長】　企画展Ⅱのほうを。大体の流れは了解しました。

【大野学芸員】　あと、展覧会のスケジュールは今のような形ですけれども、（２）のほうで、来年度新規として予算要求をしている分についてお話ししたいと思います。

先ほどからお話がありましたように、枠予算という状況の中で新規の事業をしたいというふうな予算要求をするのは非常に大変だったんですけれども、それでも今２つ要求しています。

まず１つ目は小学校鑑賞教育のための送迎バスの予算を確保したいということで、多摩・島しょ子ども体験塾助成金を申請しています。こちらで鑑賞と創作が一体となったような教育普及活動をしていくということで、今事

業を考えて助成金の申請をしています。こちらがつけば送迎バスですとか、そのためのワークショップアシスタント謝礼などが確保できます。

もう一つが教育普及事業なんですけれども、今まではずっと展覧会に付随する形で、展覧会関連企画としてワークショップがありました。そうではなく、来年度は展覧会とは別立ての教育普及事業も進めていきたい、そうすることで柔軟でより幅広いワークショップを開催していきたいということで、新規予算を要求しています。それはこちらの管理運営実施検討委員会から出された提言にもありますように、地域の資源、資産を活用し、美術館内だけに活動の場をとどめない幅広い教育普及活動を行うというふうに当館の事業方針が提言に掲げられておりますので、これに該当する事業として新たに予算を要求しています。そうしますと学芸員だけでは対応できないような幅広い内容になるかと思いますので、ワークショップ講師を招く、そのための予算を要求しています。あと館外ですとか特殊な内容になる可能性もありますので、ワークショップアシスタントの謝礼というのも予算として要求しています。

３つ目ですけれども、展覧会デザイン編集作成委託料とありますが、これは今までもデザイン編集に委託料は計上しているんですけれども、データの作成だけだったんですね。実際のパネル作成についての委託料は入っていなかったんですが、こちらに書きましたように美術館内で作成できるパネルはプリンターの制限でＡ４までです。実際の展示パネルはそれより大きなものをつくることがありますので、やはり作成自体を委託する必要があるということで、新規というよりもこれはレベルアップに近いんですけれども、予算を要求しています。今年度は企画展のみこのデザイン編集委託料というのがついているんですけれども、やはりデザインのほうは学芸もなかなか専門ではありませんし、企画展だけではなく所蔵展のほうでも当然デザイン編集委託料を初めは要求しようとしたのですが、しかし枠予算の関係ではそれはなかなか難しいということで、来年度も所蔵展のほうは断念して企画展のみ要求しています。

あと最後にありますのが、先ほども少しふれましたが、所蔵品目録のデータベース化を進めていきたいと思っています。その入力作業をお願いするための臨時職員の賃金というのも新たに新規で入れています。

あと最後「その他」に入る前にここで――いいですか、そのまま行って。

【鉄矢会長】　　はい。

【大野学芸員】　　最後（３）その他とありますけれども、ぜひこちらの委員会のほうで協議いただきたい、ご報告したい内容をまとめました。

まず１つ目なんです。印刷製本費を有効活用するための案です。いろいろ節約しました結果、今年度少し印刷製本費がまだ余っています。それを有効に活用するために、現在はポストカードとカタログしかありませんので、学芸のほうでは例えば一筆箋など新しい美術館での販売物をつくってはどうかと。企画展などでいろいろなグッズを販売しますけれども、それを見ていましても一筆箋は非常によく出ていますので、当館のほうでも何かつくりたいという案です。

ほかに所蔵展、共通で配布できるようなリーフレットをつくってはどうか。例えば所蔵作品の代表的な図版と中村研一、あるいは作品に関する解説、年表などを載せたものを今製作費があるうちにつくっておいて、今後使っていきたいという話も出ていますし、美術館の年間スケジュールというのが普通あちこちの美術館は出していますが、当館はありませんのでそういうものをつくってはどうか。でも今お話ししましたように、この段階で来年度のスケジュールが決まっていませんので、なかなか年間スケジュールをつくるのは難しいかもしれない。いろいろな案が出ていますので、こちらの委員会のほうでも協議いただいて、ご意見をいただければと思っております。

２つ目なんですけれども、東京学芸大学美術講座正木研究室、デザインの研究室ですけれども、そちらとの連携状況についてこれまでもたびたびご報告してきたんですけれども、今回の展覧会でもリーフレットをつくっていただきましたり、連携内容もレベルアップしてきております。これについては小金井市、あと市立の美術館として地元の大学と連携する官学連携を進めていくということで意義がある内容だと思いますし、美術館のこういう展覧会デザインを地域の大学と連携して開発というか進めていくというのはあまり聞いたことがないものだと思いますし、画期的な内容だと思いますので、これを今後も進めていきたいと、私たちは思っています。

あと３番として、先ほどアートエコバッグのほうでもお話ししましたように、江戸東京たてもの園などとの連携が少し進みましたので、これをここで１回で終わらせないで続けて何か連携していきたい、たてもの園だけではなくほかの市内の文化施設と連携して何かできないかというのを、まだ具体的

には動いていないんですけれども、何回かお会いしてミーティングを重ねているような状況です。

４番目ですけれども、来年度は学芸員実習をそろそろ受け入れを検討すべきではないかというような意見が、美術館の職員のほうからは上がっています。

以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

「その他」では意見をくださいという話もありました。今までの事業全体と、まず最後の意見くださいを別にして、「その他」の前までで疑問点やご意見がございましたらお願いします。

いいですか。はい。

では「その他」の部分で、印刷製本費で有効活用案というところがありましたけれども、何かご意見等ありましたら。

「一筆箋など」という一筆箋は、なぜ一筆箋というのが唐突に出ているのかなというのがすごく気になるんですけれども、ご説明を。

【神津学芸員】　　今やっている「田村一男の世界」の松本市美術館から買い上げて売っている物でも、一筆箋でなおかつ出ている作品が載っているのが一番最初に売り切れたので。ちょっとした使い勝手がポストカードよりいいというお客様が多いというのと、あとはちょっと違った視点かもしれないんですが、学芸員のほうが別の美術館の学芸員ですとかに手紙を書く際に、今堂本印象さんの一筆箋もしくは田村一男さんの一筆箋で書いているんですね。なので、それがもし研一さんのがあればいいなという、やっぱりちょっと違う視点で見ていると。

【大野学芸員】　　堂本印象のときも、やはり堂本印象美術館から一筆箋を買い上げてそれを販売したんですけれども、売れ行きがよかったんですね。ちょっと美術館のグッズとして……。

【鉄矢会長】　　スタンダード化している？

【大野学芸員】　　スタンダード化……。ただ縦長の縦書きのよくある一筆箋がどうなのか。堂本印象も松本市のもたまたまそういう形だったんですけれども、だからといって当館も一筆箋の形である必要はないかもしれない、メモパッドのようなものでもいいかもしれませんし、その辺は考えていきたいと思います。

【薩摩学芸顧問】　最近一筆箋が、ずっといろいろなミュージアムグッズが開発されてきても、王座の座はポストカードなんですが、一筆箋がどういうわけだか非常に伸びていまして。多分長い手紙を書かなくなってきたんじゃないかと思うんですよ。印刷物、ワープロから打ち出して手紙を書くことが、何かやっぱりちょっと自筆でメモを入れるみたいなそういう時代になってきたのかなということと、それから一筆箋の場合、美術館のグッズでやる場合には大体決まっていまして、風景か花か犬ちゃん、猫ちゃん、それから人物。大体これなので、当館には全部ある――あっ、犬ちゃんのじゃないかな。

【大野学芸員】　猫ちゃんが……。

【薩摩学芸顧問】　あっ、猫ちゃんか。

【大野学芸員】　猫は、ポストカードの中ではかなりいい売れ行きなんです。

【薩摩学芸顧問】　モチーフは非常によいですね。

【鉄矢会長】　わかりました。それで理由はわかった。

私からは、ワークショップとこういうことができますよという学校向けのご案内ツールみたいなものが一つあってもいいのかなとか、それからあと実は４年生の鑑賞教室用の大きな複写の絵とかいうのを最初に預けてあげるとか、これからこれの本物を見にいくんだよとか、例えば今何とか美術館に入れられちゃってアメリカのものだと言っていたのが開館のときにありましたよね、戦争画とか、ああいうものの大きな複写版みたいなものは、印刷費にならないですかね。そういうものでやっぱりこういう少し実物大ではなくても少し大き目のものを小学校に預けて、３日間、４日間それを眺めてもらってから来てもらうとか、鑑賞教室のツールって多分なかなかつくれと言ったときには予算がついていないと思うんですよ。でも来られない小学校にはどうやって行くんだよとかということを対応すると考えると、やっぱり作品が幾つか複写物でもいいからあると、というような気もします。それはワークショップのつくり方だと思いますけれども。

あと何かラブコールを込めて「日本小さな美術館マップバイ小金井」、はけの森美術館がねらっているという、「こいつらねらっているな」というラブコールをしているような、「あなたは行ったことがあるか」という、小金井はけの森美術館の学芸員が選ぶ、これはというちっちゃい美術館フェチが喜ぶような情報が載っているようなのとかも、僕はいいかなと、個人的な意

見です。

ほかはないですか。

【薩摩学芸顧問】　一筆箋は、私個人的に好きなのでいいと思います。やっぱりどうしてもそういう活用できるものを買いたいなというのがあると思うので、特に女性はきっと好みがそういうのがあると思いますのでいいと思います。

あとちょっと具体的ではないんですけれども、やっぱり小さい美術館ならではの何かそういう今印刷製本費が少しあるというのであれば、何か独自のものをつくられたらいいかなと思うので、今美術館の年間スケジュールとかも大変だと、まだはっきり決まっていない中でつくるのは難しいと思うので、次の予告みたいなのがあれば、そういうのでもいいんじゃないかなと思います。

【鉄矢会長】　ちなみにこの近くってポストあるんですか？　というのは、よくポストカードとこんな雰囲気がよくてテラスみたいないすがあって、今は冬ですけれどもポストカードを買ってちょこちょこっと「こんな美術館に来ています。」と買ったときに書いて、ポッと投函できるのかどうか、この雰囲気のままできるといいなと思ったんですね。

【神津学芸員】　できますよ。

【鉄矢会長】　でも切手は売っているのかとか、美術館が切手を用意できるのか。

【事務局天野】　難しいと思います。

【鉄矢会長】　今度郵政が変わったときに、どういうタイミングでやるのかわからないですけれども、できたらそこの前のテラスでよく座って休んでいる、歩いている人たちがいて、「ここでこういうことをやったよ」とポンと送るのとかそういう切手もちょっとありますよ……。

【事務局天野】　この方向がいいのかどうかというのがありますけれどもね。例えば図録を送ってくださいという要請が結構あるんですね。その場合には以前は郵送料も含めて送ってくださいというふうにお願いしていたんですが、最近は何とかパックとかそういうのがあって、着払いで送れるんですね。ですから純粋に図録の本とかその値段だけ、本だけ現金書留で送ってもらって着払いで送っている……。

【鉄矢会長】　あっ、私の言っているのはそういう意味じゃないのです。

【事務局天野】　　いや、そういうようなことをやっていますので、例えば切手だとかそういうのはできないけれども、例えばこれはできるかできないかはちょっと検討するとして、例えばお金を預かって私どもが代行してポストに投函するとかということは、サービスとしてできるかもしれない。ただ地方公務員法とか云々とかという法律がありますので、それが可能かどうかというのはあります。

【鉄矢会長】　　いや、それでたまたまこのポストカードというのはどうやっているんだろう、実はポストカードって、買っていって使うときには何か熱が冷めていたり、美術館展が終わったときには「あっ、これはよかったよな」とかって買ってきて、家でちょっとこうやってどこかに入れて、「あっ、これ、あった、あった」と年数がたっているのが多いので、その熱いときに文章が書けて、スタンプが乗っけてポッと自分の手で入れられるというのが、とってもここの美術館に合いそうな気がしたので、ちょっと言ったまでです。

【神津学芸員】　　お手紙の講座の何かとかも、それをやってもおもしろいかもしれないかもしれないですね。研一の書簡を見るという講座は、コラージュと一緒に所蔵品展のときに続けてやっていこうと思っていて、そのときに「ぜひ手紙を持参ください」と言って……。

【鉄矢会長】　　あっ、そうですね、「切手をご持参ください。」とかありますね。

【神津学芸員】　　はい。それで当館のポストカードというのを作成してもおもしろいのかもしれないですね。

【事務局天野】　　あと印刷費の工面をどうするか。

【宮村副会長】　　来館者の方とかで、こういうものがあったらいいなというような意見とかはあるんですか。

【大野学芸員】　　時々いただきますね。今ポストカードにはなっていない絵で「どれどれの絵のポストカードはないですか。」というのは幾つかありました。そういうのはメモしておいて、今度増刷、新規でつくれるときに参考にしたいと思います。あとは「目録はないんですか。」と言うご意見も多いです。

【鉄矢会長】　　はい。

【事務局天野】　　目録については、今年度調査研究という予算が組まれて

いるんですけれども、来年度以降も調査研究をやっていく必要がある。財政のほうに今年度の予算要求をするときに、そういうようにして目録をつくるので、いつごろつくるんだという話が出ました。それについては、調査がある一程度進んで資料がきちっとまとめられた段階で図録等の印刷が入るから、何年先になるかわからないけれどもそういう要求もしていくよというふうには、財政の方には昨年度言った経緯があります。

【薩摩学芸顧問】　ちょっと……。

【鉄矢会長】　はい。

【薩摩学芸顧問】　もう時間が時間ですので、ちょっと相談みたいな感じになってしまうかもしれませんけれども、これだけ活動してきて、やはり来年の事業にもかかわることなんですけれども、ある程度ほんとうに試行錯誤でやってきたこの美術館が、ある程度見えてきた部分が出てきたかなと思っております。やはりこの美術館はどうあがいても入館者数が５万、１０万なんていう人数になるはずはないわけで、理想的な目標は例えば１万ぐらいに設定しておいて、そこに向かって努力する程度のことだと思うんですね。しかし逆にそれをとれば、昨今いろいろな美術館が数値目標とかそういうような何か数値的なことばかりに力を入れているような風潮の中で、逆に考えれば質とか個性とかそういうものを追求できる状況にあるのかもしれないわけで、そういう点では学芸の方々にはなるべく自由な発想でいろいろなことをやってもらいたいと思うんですね。今年はその成果が随分出てきているように思いますので、多分理想的には企画展２本と所蔵品展２本を交互にやりながら、その間にいろいろなものをちりばめていくというようなのが、ひとつパターン化していくのかなというふうに考えております。

それからもう一つは、この前の議事録にも書いておりましたけれども、やはり施設の関係、それから人的なパワーの関係からいって、ここはいわゆるまさに数値的なことと言いましたけれども、ひたすら開館数を追求するところではないだろうと。これはコレクション展を中心にやっているところはどこもそうなんですけれども、例えばこの一番最初の表の１枚目にありますコレクション展のⅠとⅡを見ても、片方は約２カ月、片方は約３カ月、もちろんこれは季節の問題とかいろいろありますけれども、しかし、どちらもゴールデンからかゴールデンウイークを挟んだ、片方は夏休みを挟んだ３カ月という条件の中で、実はあまりこれは変わっていないんです。仮にこれを４カ

月やったとしても、多分それほど人数は変わらないです。コレクション展というのは大体そういうものなので、だからデレデレ、デレデレやったら結局人件費ばっかりかかって、採算的にも決していいわけではないと。ということから考えると、やはりある程度開館と休館のめり張りをつけて、そして休館のときは決して遊んでいるわけではない、休んでいるわけではないので、そこで次の仕事あるいはまさに目録をつくるという非常に知的な仕事をやっているわけで、やはりこの美術館はこういうめり張りをつけていったほうがかえっていいだろうという気がします。ただしその場合大事なことは、一番理想的には年間スケジュールなんでしょうけれども、いつからいつまでの間どういう企画があるということがピシッと広報されていないと、何がなんだかわからなくなってしまうということなんだと思います。

それから「その他」の一番最後にありました学芸員実習受け入れの検討というのは、これはやはりこの美術館としての教育という立場からいったら、小学生を中心にということはありますけれども、やはりこれは少し学芸員のスキルアップということも含めて考えるべきかなと思います。これは多分２つあると思います。１つはもう既に連携が進んでおります学芸大との特定の関係、つまり学芸大が求めるような教員養成の過程、あるいは学芸大ではできないようなことをこちらでもって補完するようなことが１つ。

それからもう一つは全く不特定多数といいましょうか、動きと。これは内容的にはかなり違ってくると思いますし、時間数的にも違ってくると思いますけれども、このあたりでいうと、この点がやはり美術館として、小さいけれども一流の美術館になっていくためには、少なくともプログラミングはしていかなければならないところだと思います。また最初からわかっていたんですけれども、これを磨くためにはまず美術館側の地力がつかないことにはどうにもならないので、少し体制が固まってきましたので、この検討というのは次の大きな課題かと思いますので、委員の先生方もいろいろとご検討をいただければと思います。

私からは以上でございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

その他、ご意見ございませんでしょうか。

【小柳館長】　　私のほうからは、先ほどの予算要求がありましたけれども、なるべくつけるような方向で、つけていただきたいということでお願い

しておりますので、その辺に関して全力で取り組んでまいりたいというのが実情でございます。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　よろしいですか。

【宮村副会長】　　ええ、ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

時間ほぼぴったりで、平成２０年度第２回小金井市はけの森美術館運営協議会を閉会させていただきたいと思います。ありがとうございます。

【一同】　　ありがとうございました。

――　了　――